

# ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動

—— その全体像と「民族主義的」特色 ——

## 第Ⅱ部 一般教育、青少年教育、および結論

竹 岡 健 一

### 第Ⅰ部目次<sup>1</sup>

序論

#### 第1章 職業教育

1. ドイツにおける商業学校の発展

2. DHV の職業教育

(1) 商業教育全般

(2) 語学教育

(3) 商業関連の書籍

(4) 商業関連の雑誌

3. まとめ

#### 第2章 一般教育

##### 1. 第17部門を中心とする一般教育の概要

序論で述べたように、DHV の教育活動においては、商業分野における職業上の知識のみならず、より広い一般教養をもたらすことが重視され、しかも、そのすべては民族主義的な立場に立脚して行われた。また、この分野の活動は、主として連合の第17部門によって担われていた。本章では、こうしたDHV の一般教育に関わる活動を詳しく見て行きたい。

そこで、まず1925年の『民族性と生活』第8号に掲載された記事「第17

<sup>1</sup> 本稿の第Ⅰ部については、竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動——その全体像と「民族主義的」特色—— 第Ⅰ部 序論と職業教育（鹿児島大学言語文化論集『VERBA』第35号、2011年、91～112頁）を参照。

部門の教育活動をひとめぐり」に基づいて、この部門の活動の概略を把握したい。記事は、「すべての生活領域での会員の根本的な教育をもたらす」<sup>2</sup> という連合の教育活動の目標を確認することから始まっている。

経済の指揮を目指して努力する者は、一方では有能な商人でなければならず、職業において無能であってははいけません。他方で彼は、意見を述べるために、十分な一般教養を使いこなすことができ、国民経済学と政治の時事問題に十分精通していなければなりません。これに三つ目のものが加わります。つまり、強い信条の要求です。職業の有能さと一般的知識は、それらを獲得した男性が確固たる円満な人格を持たず、自らの天分を正しく用いることができないとすれば、何の役に立つでしょう。（傍点訳者）<sup>3</sup>

このように、第 17 部門の活動においては、一般教養教育と同時に「信条」の教育が重視された。そして、その二つの目標を達成するための具体的な活動について、記事では、次のような五つの項目に分けて説明がなされている。

#### ① 講演の資料の貸し出し

地方支部での活動に資するため、講演の構想や手引書などの貸し出しを行う。講演のテーマは 150 以上あり、スライドのないものが約 40、独自の改作が可能で、そのために必要な資料が提供され得るものが 49、一般教養的な内容の 3,000 枚の写真があるスライドつきのものが 60 以上備わっている。資料は絶えず補完され、最新の状態に保たれる。（1925 年の上半期には、一般教養的な内容のスライドつきの講演の貸し出しが 234 件行われた。）

<sup>2</sup> Weitenauer: Rundgang durch die Bildungsarbeit der Abteilung 17. In: Volkstum und Leben. Beilage zur „Deutschen Handels-Wacht“. Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt, 1925, Nr. 8, S. 441.

<sup>3</sup> Ibid. S. 440.

## ② 社交の育成

連合の教育活動全体は性格の形成と洗練という効果を及ぼさねば成果を得ないとの立場から、高貴な社交の夕べをもたらすための活動である。「<ドイツの社交>シリーズ」や「パーティー＝シリーズ」など、社交の夕べを整えるための50～60の資料ファイルや手引書の貸し出しを行う。

## ③ 文化的催しの吟味

文芸や演劇を吟味、検査し、利己的で非国家的な種類のものに対して会員に警告し、民族的生活の価値に溢れるものを通じた健全化の道を示す。具体的には、劇場民族同盟（Bühnenvolksbund）とドイツ劇場（die Deutsche Bühne）との協力により、多くの劇場の上演計画に影響を及ぼす。

## ④ 作業共同体

1920年のブラウンシュヴァイクでの連合大会で、労働組合、経済、政治に関する連合の認識を会員が身につける場として提案され、設立された活動である。連合には、この民族主義的作業共同体を主催できる同僚が76人おり、作業のための6件のテーマに関する200の資料が備えられている。参加者は現在1,000人程度だが、活動の成功のためにはその数を十倍に増やすことが必要とされる。

## ⑤ 時事問題に関する資料の提供

政党、委員会、立法団体などにおいて連合の見解を支持する人々のために、時事問題に関する連合の立場を示す資料を提供する。また、民族主義的作業共同体の中で、政治的な関心を持つ同僚を、政治の分野での活動的な協力者へと育て上げる。（傍点訳者）<sup>4</sup>

ここでも、一般教養教育において国家的・民族主義的な観点が重視されていることがわかるが、こうした活動に対して、連合では、この記事が書かれ

<sup>4</sup> Vgl. ebenda.

た時点で、外部からの協力者を含め、一般教育のための理事が 1,113 人、社交の育成のための理事が 548 人おり、またそれらの理事に対して、一般教育と政治に関する資料が『月刊案内書』として提供されていた。<sup>5</sup>

それでは以下、これらの活動の具体的な内容について、把握し得る範囲で詳しく見て行く。なお、その中には、第 1 章で取り上げた職業教育に関連する内容もしばしば登場するが、これは、両分野の活動がしばしば併せて実施されていたことによるものであり、DHV の教育活動において職業教育と教養教育が不可分の関係にあったことを示す一つの証左である。

## 2. 一般教育の具体的な内容

### (1) 講演活動

DHV で講演活動が始まったのは、連合に書店——当時の名称は「ドイツ民族書店」——が設立されたのと同じ 1904 年である。経済政策、国家政策、歴史、芸術、文学など様々な学問分野に互る講演がシリーズとして編成され、スライドや映画といった視覚教材も用いられた。講演は主に冬季に夜間を利用して行われたようだが、1909 年の冬になると、多数の講演者が地方支部を巡回して講演を行い、連合の外部から協力を申し出た作家、芸術家、学者らとの共同作業も始まった。連合の幹部の一人で、後に「ドイツ家庭文庫」の役員 (1916 年～) や『ドイツ商業の番人』の主筆 (1920～30 年頃) を務めたアルベルト・ツィンマーマンは、1921 年の著書『ドイツ民族商業補助者連合 その発生、活動、および意志』において、第一次世界大戦勃発前までの状況を振り返って、次のように述べている。

青少年部門の活動と連携して、教育の努力のための部門のきわめて遠大な措置が行われました。これらの努力は、すでに世紀末の頃に始まり

<sup>5</sup> Vgl. ebenda; Nerger, Katja & Zimmermann, Rüdiger (bearbeitet): Zwischen Antisemitismus und Interessenvertretung. Periodika und Festschriften des Deutschnationalen Handlungsgehilfen-Verbands in der Bibliothek der Friedrich-Ebert-Stiftung. Ein Bestandsverzeichnis. Bonn: Bibliothek der Friedrich-Ebert-Stiftung 2006, S. 27.

ました。多くの地方組織が、授業のコースや講演のシリーズを催しました。しかし、散発的に実施されていた活動が、1904年と1905年に、正式なシステムへともたらされました。連合そのものが、教育と補習の努力の担い手となったのです。連合は授業のコースの催しのための詳細な、批判的に入念に仕上げられた手引書を刊行しました。地方グループに、継続的に資料が引き渡される特別な教育理事の選択を指示しました。数多くの中年の同僚を、コースの指導者として養成しました。実用的な講演と一般的な講演のための講演の構想を出版しました。科学と文学に関する有名な講演の大家を連れた周遊旅行を催しました。実際、戦前の数年間には国内外での大規模な勉強旅行と休暇旅行が催されました。<sup>6</sup>

また、上記1925年の記事には、同時期の実施方法やスタッフに関して、次のように記されている。

今年の冬の活動のために送付される資料には、準備のための活動計画、講演の催しの準備のための諸原則、広報宣伝、一連の模範的パーティー、模範的計画などの例示に加え、冬のための講演スタッフのリストも含まれています。8人の著名な芸術家以外に、職務上指導的な立場にある12人の連合の同僚が、教育的な講演のために獲得されました。つまり、ディラー、グラッツェル、グロイ、ギュンター（『ドイツ民族性』）、ハーン、ヘンシエル、ヤーン博士、ケッペル、クレープス博士、ローテ博士、シュターベル博士、ツィーグラールといった人たちですが、彼らは、1925年11月1日から1926年4月30日まで、講演旅行の管理を免除されます。これら連合の講演者に対しては、地方組織は、小額の講演料を支払うだけで結構です。それによって、小さな地方支部にも、冬の間に2回から3回まで、連合の講演者にその地で講演をさせることが可能になります。

<sup>6</sup> Zimmermann, Albert: Der Deutschnationale Handlungsgehilfen-Verband. Sein Werden, Wirken und Wollen. Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt, 1921, S. 57f.

申し込みは、9月10日までに、ガウの教育局を通して、第17部門（一般教育）に届けて下さい。<sup>7</sup>

このように、DHVの講演活動は、ハンブルクの本部と地方支部との間の十分な連携の下に実施されていた。また、講演者について、名前をあげられたうち、特に強い民族主義的な志操を持つ人物として、保守革命的な雑誌『ドイツ民族性』の編集者であるヴィルヘルム・シュターペルと A. E. ギュンター、それに右翼的な「若きドイツ人同盟」の中心的な設立者フランク・グラッツェルがあげられる。なお、1925年には、連合全体で3,421の講演が行なわれ、166,000人が参加した。<sup>8</sup>

ついでながら、引用の中で「ガウ」と呼ばれているのは、本部と地方支部の間に位置する、県ないしは州のレベルのまとまりであり、およそ12の地区に分かれていた。ここで、独自の機関誌を刊行していたガウをあげると、アルトプロイセン、バイエルン、ブランデンブルク、ブランデンブルク＝ポンメルン、マイン＝ヴェーザー、ミッテルドイチュラント、ニーダーザクセン＝ヴェストファーレン、ニーダーザクセン、ノルトマルク、オストマルク、ザクセン＝アンハルト、ズエートヴェスト、テューリンゲン、ヴェストマルクである（一部に重複が見られるのは組織の改変によるものと思われるが、詳細は不明である）。また、同じく独自の機関誌を刊行していたことが確認されている主な地方支部としては、ベルリン、プレスラウ、プエノス・アイレス、ケムニッツ、ドルトムント、ゲラ、ハーゲン、ハンブルク、カッセル、ライプツィヒ、マグデブルク、ネルトリンゲン、ライン＝ラーン、ザルツブルク、ウンターフランケン、ヴィースバーデン、ヴッパータールなどがあり、ここからは、ドイツ国外の連合の支部の活発な活動も窺われる。<sup>9</sup>

<sup>7</sup> Ibid. S. 440f.

<sup>8</sup> Vgl. Stange, Heinz: Die Kaufmannsschule des D. H. V. in Hamburg. In: Kaufmännische Praxis. Beilage zur „Deutschen Handels-Wacht“. Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt, 1926, Nr. 9, S. 454.

<sup>9</sup> Vgl. Nerger, Katja & Zimmermann, Rüdiger (bearbeitet): a. a. O., S. 29-36.

## (2) スライドと映画

ところで、このように実施された講演は、内容的にはどのようなものだったのであろうか。それを知る上で役に立つのが、『民族性と生活』の1922年第8号に掲載された記事「DHVのスライド課」であり、「民族市民的」<sup>10</sup>と自称するDHVの教育活動において、スライドおよび映画がどのように活用されているかが詳しく述べられている。それによれば、1922年の時点で、DHVは50万マルクの価値をなす約5,000のスライドを所有しており、すでにこの金額の大きさに、「ドイツの商業補助者の教育に対する連合の責任感」<sup>11</sup>がはっきりと現れている。そして、用意されている90以上のスライドつきの講演は、「会員に真の喜びと豊かな教訓を与えることができるシリーズ」<sup>12</sup>となっており、職業教育と一般教養の両面をカバーしている。

スライドの一部は、職業の知識に、実践的な職業教育に役立ちます。もう一つの部分は、一般教育の領域で、私たちの会員に視野の拡大と人格の充実をもたらすことに役立ちます。<sup>13</sup>

ただし、スライドを用いた講演の一つひとつが、職業教育と一般教育のどちらかに明確に区別されるわけではない。例えば、「商人と世界経済」というスライドつきの講演では、経済的内容と地理学的内容が不可分に結びついている。と同時に、この講演は、連合の出版物における文字による情報を画像によって補うものと位置づけられている。

私たちの仲間は、私たちがハンザ同盟出版社から『商人と世界経済』というシリーズの本を刊行していることを、『商業の番人』の広告で知っています。スペイン、アルゼンチン、メキシコに関する本は刊行され、

<sup>10</sup> Weinberger: Die Lichtbildstelle des D. H. V. In: Volkstum und Leben, 1922, Nr. 8, S. 409.

<sup>11</sup> Ebenda.

<sup>12</sup> Ebenda.

<sup>13</sup> Ebenda.

さらに続編があります。これらに叙述された知識が、私たちが同時に準備するスライド付きの講演の具体性によって補われます。こうして、言葉と写真の内的相互作用が生じ、それは、私たちの地方組織に、経済的・地理学的な啓蒙の計画的な拡充を可能にします。<sup>14</sup>

ここで、商工業との関連性が強いスライドのテーマをあげれば、「宣伝」、「経営の近代的体制」、「食塩、磁器、ガラス等の製造」、「活字の製造と解体」、「遠洋漁業」、「ドイツの電化」、「石油——石炭の競争相手」といったものがある。また、同じ分野に関する映画も準備されており、その理由は、「商業、工業、原料生産の分野の叙述は、しばしば静止画像よりも動画によってより具体的で生き生きとしたものになるから」<sup>15</sup>である。具体的なテーマとしては、「ドイツの工業」、「書籍印刷技術」、「石炭と鉄」、「鑄造」などがある。なお、これら映像を用いた講演の目的は、単に現実の代用品を提供することではなく、映像で見たものを実際に見たり、それに関する本を手にとったりしようとする気持ちを惹き起こすことにある。その意味で、これらの講演に引き続いて、企業見学が行なわれる場合もある。

一方、より一般教養的なテーマのスライドとしては、次のようなものがあげられる。

- ① 「リューネブルク荒野の美」、「ドイツ・アルプスの世界」、「中部ドイツの風景」。これらはドイツの風土を扱っており、第一次世界大戦後の通貨価値の下落による経済的困窮の中で旅行や放浪ができないことによる「ドイツ人の魂の苦境」を救うものである。
- ② 「時代の移り変わりの中でのドイツの海外貿易」、「パリ会議の経済的影響」、「自由ハンザ都市」。これらは、その内容が、ハンザ同盟出版社から刊行されているヴィルヘルム・シュターペルの『民族市民の教育』

---

<sup>14</sup> Ebenda.

<sup>15</sup> Ebenda.

とヴァルター・クラッセンの『ドイツ民族の生成』によって補われるものである。

- ③ 「職員の個人住宅」、「小住宅、その家具調度」、「家の装飾と家の文化」。これらは DHV が職員層が個人住宅を持つことに力を注いでいることと関連しており、雑誌『個人住宅と労働』で述べられている内容を映像で示し、職員層の持ち家への憧れについて語り、連合の文化意志を証明する。
- ④ 「アルプレヒト・デューラー」、「ルートヴィヒ・リヒター」、およびその他のドイツの芸術家の絵画について。
- ⑤ 「DHV の建築」。ホルステンヴァルにある巨大な本部ビルおよび他の都市にある連合の建物を、連合の活発な意志の強さの表れとして示す。
- ⑥ 「フリードリヒスブルン」と「ロベダ山」。これらは、連合の社会的・文化的な感情の目に見える表現である。<sup>16</sup>

以上のようなスライドの内容を例示した後、記事は次のような言葉で締めくくられている。

私たちは、スライドと映画をますます多く利用するでしょう。私たちの文化活動全体は、民族市民の教育という思想に貫かれています。作業共同体、パーティー、スライドがある講演またはスライドのない講演は、相互に補完し合います。私たちは今日の映画の危険性を知っており、悪いものに代えて良いものをもたらすつもりです。(傍点訳者)<sup>17</sup>

### (3) 社交の育成

同じようにドイツ人の民族性に立脚した教育という意味で、DHV は、パーティーのような社交的な催しにも強い関心を持っていた。こうした点がより

<sup>16</sup> Vgl. ebenda. なお、職員層の個人住宅に関する連合の活動については、次を参照。Vgl. Zimmermann, Albert: a. a. O., S. 73f.

<sup>17</sup> Ebenda.

はっきりと表れているのが、『民族性と生活』の1925年第8号に掲載された記事「社交の育成という課題」である。ここでは、連合の「民族市民の教育」が「民族生活の健全化」<sup>18</sup>を目的としていることに触れた後、社交と教育のかわりについて、次のように述べられている。

社交的な種類のすべての催しは、私たちの民族の精神生活の発展と信条を担う力の獲得にとって大きな意義を有しています。真の社交性は、同時に教育活動です。これは最上位の原則です。課題の範囲はとてまぐくなります。一つ目には、それは社交への自然な欲求を精神的・文化的に価値のある形で満たすことです。二つ目には、この社交の欲求を教育活動との緊密な関連の中に置くことであり、三つ目には、社交的な催しの形式と内容を通じて信条の力を強め、私たちの民族の中に文化を担う層が再び成長することです。(傍点訳者)<sup>19</sup>

著者であるオットー・ヘンシェルは、当時世間一般や団体等で行われていた社交的な催しについて、それらは「純粋な喜びの原動力ではなく、責任を持たぬ、欲の深い、富の精神しか案出できない、実に疑わしい種類の喜びと手段」であり、「瞬間の享受と感覚の喜び」、「単なる〈慰み〉」に過ぎないという考えを持っていた。ヘンシェルがここで念頭に置いているのは、具体的にはキャバレーや大衆酒場、「下品さ、流行歌、黒人ダンス」である。つまり、「赤裸々な金銭欲と利欲」によって人々に押しつけられているこうした「大衆酒場の文化」は、劇場の催しや様々な身分団体や職業団体の催し、例えば定期的な集会や創立記念祭といった催しにまで影響を及ぼし、それによって、「私たちの民族の未来に対する責任を自己のうちに担っている人」(傍点訳者)を不安で満たしていると言うのである。これに対し、ヘンシェルは、「純粋な人間愛または民族共同体に対する責任」(傍点訳者)に立脚した「生活感情

<sup>18</sup> Otto Henschel: Die Aufgabe der Geselligkeitspflege. In: Volkstum und Leben, 1925, Nr. 8, S. 441.

<sup>19</sup> Ebenda.

の高まり」<sup>20</sup>をもたらすような社会的催しが行なわれるよう配慮することを求め、それを DHV による教育活動の課題と位置づける。

社交の育成は、教育活動の一部と見なされねばなりません。つまり、表面的な満足ではなく、私たち偉大なドイツ人の、私たちの思想家や詩人、画家、音楽家の、あるいは私たちの民族の名誉ある歴史に現れた政治的指導者の集合です。すべての催しは、教養の財産を増やさねばならず、生の喜びの強化と教養の深まりによって、民族全体がなすべき大きな課題に役立つようにされねばならないのです。(傍点訳者)<sup>21</sup>

また、シュパンダウで DHV の作業共同体に従事し、1926 年からはナチスのハンブルク支部長にもなったアルベルト・クレープスは、『民族性と生活』の 1926 年第 9 号の論説「教育課題としての身分化」において、連合の活動の最終目標である商業職員の身分の上昇と確立という課題にとって社会的な催しを持つ意味を、次のように述べている。

個々の商人はその生の遂行の中で、個々の地方支部はその公の行動の中で、彼らの身分に求められる外面的・内面的態度を守らねばなりません。その催しの中で猥談がレベルを決め、パーティー全体がシミー（肩をゆするアメリカのラグタイムダンス。1920 年代に流行。= 訳者注）に合わせて『おいハンス、膝で何やってるんだ』を歌う地方支部は、身分感情の遺憾な欠如を示しており、彼らが彼らの会員や世間の間で望む価値のある名声を享受してはなくても、驚くには当たりません。真の教養の本質は、多くの知識にではなく、こうしたことに表れるのです。ここに、私たちが労働組合を越えて身分へと成長できるかどうかの答えが懸かっている課題があるのです。<sup>22</sup>

<sup>20</sup> Ebenda.

<sup>21</sup> Ebenda.

<sup>22</sup> Krebs: Standwerdung als Bildungsproblem. In: Volkstum und Leben, 1926, Nr. 7, S. 365.

1920年代のドイツにおけるアメリカの大衆文化の影響が強く窺われる記述だが、こうした具体的な非難の対象を考慮したとき、DHVの教育活動が「ドイツ的理念の戦い、ドイツ文化における外国精神の影響の拒否」<sup>23</sup>に向けられていたことが、実感を伴って意識されるのである。なお、第17部門では、こうした社交の育成に関しても、必要な手引書や資料を提供していた。

#### (4) 職業身分研修セミナー

「職業身分研修セミナー」については、第1章において職業教育に関する講習を紹介したが、そこはまた、連合の教育活動の指導者の養成が行われる場でもあった。この研修は、1923年4月から、連合の管理部門によってシュパンダウのヨハネ財団で始められたが、その後第17部門による講習も加わった。また、1928年からは連合のガウでも実施され、連合の職員のための講習(グループAとB)と専門教育課程(グループD)に、ボランティアの協力者のための講習(グループC)が加わり、全体の規模もそれまでの6倍となった。

『ドイツ商業の番人』の1928年第20号の記事「DHVの職業身分研修セミナー」<sup>24</sup>によれば、研修には週間講習と週末講習の二種類があり、前者は6日間に亘って午前中の4～5時間を利用して行われ、後者は土曜日の午後と日曜日の朝を利用して7～8時間行われた。そして、この年に実施された週間講習としては、グループCに関する「青少年指導者のための作業週間」(10件)、「教養と社交の理事のための講習」(6件)、「国家および市町村政策のための講習」(1件)、「作業共同体の指導者のための週間」(1件)、「経営協議会委員のための活動週間」(1件)、「地方グループ指導部のための週間」(3件)があり、約450人のボランティアの協力者が受講した。また、これらに加え、地方グループ指導部、教育理事、労働裁判官、経営協議会委員のための週末集会在19件実施され、550人以上の協力者が受講した。記事によれば、これ

<sup>23</sup> Hamel, Iris: Völkischer Verband und nationale Gewerkschaft. Der Deutschnationale Handlungsgehilfen-Verband 1893-1933. Frankfurt a. M.: Europäische Verlagsanstalt 1967, S. 126.

<sup>24</sup> Norwig: Das berufsständische Seminar des D. H. V. In: Deutsche Handels-Wacht. Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt, 1928, Nr. 20, S. 412.

らの講習は、「利益しか知らない現代の実利主義的時代精神に精力的に対抗する」ものであり、地方グループの指導者たちを「DHVにおいて指導陣として必要とされる行動型の人間」<sup>25</sup> へともたすものであった。

なお、ここで、DHV の教育活動の中にしばしば登場する「作業共同体」について、『民族性と生活』の 1925 年第 18 号に掲載された「市民大学と私たち！」に基づいて説明を加えておきたい。そこでは、DHV の民族主義的な教育活動において「作業共同体」が持つ意味が、一般的な講演や社交的活動と比較して、次のように説明されている。

私たちの連合の教育活動は、この根から成長しました。すぐに手に入れられる流行じみた成功を意識して断念し、音を立てずゆっくりと前進したのです。とりわけ会員仲間から生じる多くの困難とも戦わねばなりませんでした。けれども教育の目的を考慮して、例えば社交活動全体が形成し直され、古くからの、しかしだからこそ良くない習慣が多数犠牲にされねばなりませんでした。つまり、キャバレーのごとき底の浅さ、現代風のダンス、男たちの集会だけの冗談が。同様に、私たちの講演も単なる知識の伝達ではなく、統一のある知識と努力の形成です。しかし、とりわけ作業共同体が、上に述べた教育理念に役立ちます。講演や社交の夕べはすぐに雲散霧消し、振るわされた弦は鳴りやみ、美しい思い出しか残らないことがしばしばです。作業共同体はそうではありません。そこには、聴衆に主張や要求を投げつけ、彼らを魅了したりびっくりさせたりして、二、三時間後に去り、多くの解決されない問いや問題を後に残す活動的な講演者はいません。いいえ、ここでは人々は小さなグループになって一緒に座り、誰もが問うことができ、誰もが自分の考えを述べることができます。第 17 部門が資料を提供し、根本的な共同作業から多くの困難な問題の解決がゆっくりと成熟し、多くの幕が下り、多くの展望が開け、一つの世界観が、またそれとともに、作業への共同の奉

<sup>25</sup> Ebenda.

仕から新しい熱狂と同志としての感情が形成され始めるのです。ただし、そのような成功が花咲くには、作業共同体が単に日々の問題に従事するのではなく、究極的な事柄に触れる問題に取り組むことが必要です。ドイツ民族性に対する支持の表明という内容の世界観を形成するために、そのような素材を諸部門にもたらすことが、常に教育部門の努力だったのです。(傍点訳者)<sup>26</sup>

このように、「作業共同体」とは、少数の参加者が相互の意見交換を通して議論を深めることにより、活動への熱意や仲間意識を培いながら、ドイツ民族性に立脚した世界観を身につけて行くものであった。

### 3. まとめ

以上のように見たとき、DHVの一般教育の特色として、次のような点をあげることができよう。

- (1) 商業職員の身分上昇のための条件として、職業上の専門知識以外にもより広い教養を身につけることが重視されている。
- (2) 高額の資金を投じることにより、スライドや映画といった当時としては新しい教育手段が準備されている。
- (3) 連合の内外に多数の協力者を獲得している。
- (4) 資料の貸し出しや指導書の配付、指導者の養成といった点で、ハンブルクの本部と地方支部との間に十分な連携が図られている。
- (5) 講演を通じた一方向的な教育だけでなく、参加者が相互の意見交換を通して議論を深める「作業共同体」が重視されている。
- (7) とりわけ社会的な催しにおいて、アメリカの大衆文化の影響を排除することが重視されている。
- (6) 全体として、ドイツ人の民族性に基づいた信条ないし世界観をもたら

<sup>26</sup> Krebs: Die Volksschule und wir! In: Volkstum und Leben, 1925, Nr. 8, S. 442.

すことが目標とされている。

これらの点からも、DHV の教育活動が一労働組合の枠を超えた広がりを持つと同時に、その思想信条において労働組合にそぐわぬ保守性を持つことが窺われるのである。なお、ここでは第 17 部門が直接携わった活動に限定して論じたが、DHV の一般教養教育的活動を検討する上では、連合の読書共同体である「ドイツ家庭文庫」を中心とする出版活動、フィヒテ協会を舞台として行なわれた活動、連合の機関誌『ドイツ商業の番人』の別冊『民族性と生活』の記事、さらにはワイマール時代の連合の教育活動に大きな影響を及ぼしたヴィルヘルム・シュターペルの思想（特に「民族市民の教育」）なども考慮されねばならない。というのも、それらにおいては、連合の民族主義的な方向性と、その影響を商業職員のみならず広くドイツ国民の間に及ぼそうとする意図がより強く現れているからである。このうち、「ドイツ家庭文庫」を中心とする出版活動については、すでに拙論においてその成立と発展、文庫に収録された主要作家、宣伝媒体である雑誌『かまどの火』などを論じ、この読書共同体が、ここで扱った一般教育と同様に、非ドイツ的な諸傾向の過度の影響に対抗して、ドイツ人の民族性を堅持しかつ促進することを目的としていたこと、またそうした民族主義的な信条を、商業職員のみならずその家族にまで浸透させようとしていたことなどを明らかにしている。<sup>27</sup> その他の点については、稿を改めて論じる予定である。

### 第 3 章 青少年教育

#### 1. 商業青少年教育と民族性

第 1 章で述べたように、ドイツにおいて商業分野における学校教育が始まった契機の一つは徒弟制度の退化であり、もともと徒弟は職業教育の中心

<sup>27</sup> 竹岡健一：雑誌『かまどの火』について——ナチズムと文学メディアのかかわりに関する考察の新たな手がかりとして（日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第 116 号、2004 年、61～68 頁）、および竹岡 健一：「ドイツ家庭文庫」について——ワイマール共和国時代から第三帝国時代における右翼商業職員への読書指導の一端（研究同人誌『かいろす』第 47 号、2009 年、84～104 頁）を参照。

的な対象であった。だが、商業の専門教育と並んで民族主義的な世界観に基づいた人間形成という教育目標が掲げられた DHV においては、青少年教育においてもこの点が重視され、商業に携わる人々を年齢的に若いうちに自らの精神的影響下に引き込むことが試みられた。この点について、アルベルト・ツインマーマンは次のように述べている。

1904年5月29日、徒弟部門の設立が決定され、10月1日に誕生しました。同時に設立された『若き商人のための雑誌』が機関誌となりましたが、それはドイツで最初の徒弟雑誌となりました。古くからある連合は、以前から徒弟部門を持っていたにもかかわらず、後に雑誌の設立を模倣しました。

新しい広い領域が私たちに拓かれました。確かに私たちはとつくの昔から徒弟飼育に反対して戦い、徒弟の根本的な教育を精力的に支持していました。しかし、今や私たち自身が仕事に着手したのです。私たちは商業の知識に関連した実務的な教育と補習学校の授業を補完することを自らの義務としたのみならず、ドイツ人の民族意識とドイツの商人身分の名誉に対する感覚をも目覚まし、育成しようとしてきました。私たちは、身分のうぬぼれを抑え、身分意識そのものと身分の義務に対する感情を確かなものにし、深めようとしたのです。

『若き商人のための雑誌』において、私たちは、真の商人の精神は広く多様なものでなければならないと書いたときゲーテがどれほど正しかったかを、私たちの後継者たちに示します。私たちは徒弟に、商人の偉大な課題のイメージを、商人の国民経済学的な意味に関するイメージを与えようと試みます。私たちは彼らに、ドイツの商人はドイツの民族性にきわめて深く根ざしていることを伝え、民族を意識した商人は、金儲けしか考えない国際的な商人よりも上位に位置しているのだということに対する感情を目覚まします。

私たちのドイツ民族的な青少年メンバーは、余暇を飲み屋の汚れた空

気やダンスフロアの埃の中で過ごしてはいけません。それゆえ私たちは、私たちの後継者らとともに美しい神の世界へと出かけ、森や荒野を通り、山や谷を越えて歩きます。それは、来るべき仕事の日々のために身体を鍛え、精神を活気づけ、故郷に対する感覚を強め、祖国愛を本当に深いものにします。

私たちの努力は、商業青少年の間に共感を得ました。今日、私たちの青少年部門は約 50,000 人です。(傍点訳者)<sup>28</sup>

連合においてこの分野での教育を主として担ったのは第 14 部門であるが、その活動は、具体的には主として同盟青年運動という形で遂行された。本章では、この点について詳しく見て行く。

## 2. 「徒弟部門」から「商業青年同盟」へ

上の引用に見られる通り、1904 年、DHV には「徒弟部門」が、と同時にその機関誌『若き商人のための雑誌』が設立された。この部門は、「DHV の徒弟の父」<sup>29</sup> と呼ばれたエーミール・シュナイダーによって率いられ、1908 年に「DHV 青少年部門」に改編されたが、その活動は、引き続き「連合のドイツ = 国家的な教育の努力の枠内」<sup>30</sup> で行われた。例えば、1908 年から 1912 年にかけての聖霊降臨祭の徒歩旅行は、ハンブルクやブレーメンの地方支部との共催によりリュエネブルク荒野で行われたが、ワンダーフォーゲルのように旅行それ自体が目的とされるのではなく、その中で一種の軍事的な鍛錬もなされ、後で触れる「遍歴職人」の指導者や軍人がその指導を引き受けた。

さらに 1912 年、「DHV 青少年部門」は「商業青年同盟」(Bund der Kaufmannsjugend) へと改編される。会員数も増加し、この年に 24,685 人であったのが、1927 年には約 50,000 人、1931 年には 71,878 人となったが、組織の拡大に伴って指導者の養成も重要な課題となった。このため、ガウのレベ

<sup>28</sup> Zimmermann, Albert: a. a. O., S. 56f.

<sup>29</sup> Ibid., S. 75.

<sup>30</sup> Hamel, Iris: a. a. O., S. 146.

ルでも、その下に位置するクライスのレベルでも、教育大会、教育週間、週末大会などが盛んに催された。そして、これらの催しの頂点をなしたのが、DHVの「帝国青少年大会」であり、1921年にはライプツィヒ（諸国民戦争記念碑）で、1925年にはハイデルベルクで、1927年にはハンブルク（ビスマルクの墓所）で、1929年にはダンツィヒで、1931年にはインスブルックで開催されている。この大会が連合の思想と活動を誇示する場となったことは、すでにこれらの開催地や開催場所に表れている。つまり、ライプツィヒとハンブルクの開催場所はドイツ民族の英雄的行為と、また開催地としてのダンツィヒとインスブルックは大ドイツ的な考え方と結びついているのである。また、「およそ15,000人の青少年参加者の一人ひとりが、大会の何らかの時間に感動させられ、ノーマルなもの、通常のもの、および単に参加している者から断ち切られて、何らかの仕方で崇高なものを心に刻みつける」<sup>31</sup> ために、整列行進、たいまつ行列、制服、旗、三角旗などが強烈な印象を与え、ハイデルベルクの大会では、陸軍少将パウル・フォン・レットフ・フォルベックの演説が商業青少年たちを熱狂させた。このような「帝国青少年大会」の意味について、「1929年のDHV事業報告書」では次のように述べられている。

私たちにとつて重要なのは、成長しつつある人間の、その民族と国家  
 に対する究極の最も内面的な関係です。私たちには、青少年が歴史に対  
 する尊敬を持たずに、父なるエルベ川の自由のためにすべてを、生命  
 と財産を差し出す心構えをせよと求められずに育てられることなど考えら  
 れません。私たちは、民族性の活動に根ざした教育と防衛の力と用意が  
 ある国家を欲します。私たちは、民族と国家の独自の生活という点で尊  
 敬されるドイツ人の上に初めて、人道的なヨーロッパ人を望みます。した  
 がつて、私たちは、戦前の学校愛国主義に反対し、決定的な教育要素  
 としてドイツ民族性という概念を据えるのです。(傍点訳者)<sup>32</sup>

<sup>31</sup> DHV-Rechenschaftsbericht für 1927, S. 190. (Zitiert nach Hamel, Iris: a. a. O., S. 153.)

<sup>32</sup> DHV-Rechenschaftsbericht für 1929, S. 230. (Zitiert nach Hamel, Iris: a. a. O., S. 153.)

### 3. 「遍歴職人」

「徒弟部門」に端緒を持つ以上のような発展と並行して、「DHVにおける徒歩旅行育成のための同盟」として、1909年7月18日には、「遍歴職人」(Fahrende Geselle. Bund für Wanderpflege im DHV)が設立された。設立にあたっては、連合の幹部の一人で、後に『ドイツ商業の番人』の主筆(1913～19年)、「ドイツ家庭文庫」の役員(1916年～)、教育組織の主任(1922年～)、政治委員(1923年～)などを歴任したマックス・ハーバーマンと、「ドイツ家庭文庫」の顧問(1916年～)を務めたクリスティアン・クラウスが特に尽力した。また、「徒弟部門」と同様にこの同盟でも長を務めたエーミール・シュナイダーは、この組織の目的について次のように述べている。

遍歴職人は、ドイツの商業補助者と徒弟の間に徒歩旅行の喜びを覚醒し、深め、彼らを高貴な自然の享受に対して目覚まし、徒歩旅行そのものを最高の生の喜びの源へと形成するつもりです。<sup>33</sup>

このような「連歴職人」は、もちろんワンダーフォーゲル運動と同様、文明社会から自然への脱出という方向性を持っていた。この点について、アルベルト・ツィンマーマンは次のように述べている。

DHVには、その関心が経済的な事柄へ向かうことがほとんどない同僚もいました。つまり、少しばかり風変わりな浮世離れしていると見なされることがしばしばあるものの、そのような非難を平然と甘受する人たちです。その人にとっての王国がこの世界にはない——または必ずしもない——人々、必ずしも通常の意味で敬虔であるとは限らないが、「田舎の静けさ」に属する人々です。

そうした同僚の幾人かが、1909年7月18日に、リューネブルク荒野の北端のファルケンベルクに集い、そこで「遍歴職人」同盟を設立しま

<sup>33</sup> Das Fahrenden Gesellen Zunftbüchlein, S. 99. (Zitiert nach Hamel, Iris: a. a. O., S. 147.)

した。

遍歴職人は、徒歩旅行の育成を行います。冬も夏も、彼らはギターを携えて、あるいはギターを持たずに、森や荒野へ出かけます。しかし、彼らは絶えずあちこち歩き回ることではなく、彼らにとって徒歩旅行が戯れの恋の機会であることもほとんどありません。徒歩旅行は彼らに、都会に住む人々にとってきわめて容易に失われてしまう生きた自然との結びつきを再び打ちたて強める可能性を与えるべきなのです。遍歴職人は、敏感にされるべき目に、野原や耕牧地、山や谷における私たちの祖国の美を示し、そのようにして、徒歩旅行を自然の気高い享受と純粋な喜びの源とするつもりです。

そして、冬の夕べに、「職人」たちは、暖かい巢に座って、歌ったり、音楽を奏でたり、物語りをしたり、読書をしたり、物思いに耽ったりします。お酒も飲まなければ、煙草も吸いません。というのも、彼らは、この二つのものを拒否するか、それらにひどく不信を抱くかしているからです。<sup>34</sup>

だが、「遍歴職人」もまた DHV の組織である以上、「民族の再生の活動」<sup>35</sup>を強く志向していた。ツインマーマンは、続けてこう述べている。

「遍歴職人」は私たちドイツ民族的な商業補助者運動の構成要素であり、その運動の土台の上にもみ成立し繁栄し得るのです。<sup>36</sup>

したがって、「商業青年同盟」と同様に、「遍歴職人」においても、徒歩旅行は行進となり、遊びは戦闘演習となった。また、それは、DHVにおいて、連合とその青少年グループにおける指導者の人材を養成する役割を担ってもいた。会員数は、1914年には約6,000人であったのが、第一次世界大戦まで

<sup>34</sup> Zimmermann, Albert: a. a. O., S. 70f.

<sup>35</sup> Deutsche Handels-Wacht, 1914, Nr. 9. (Zitiert nach Hamel, Iris: a. a. O., S. 148.)

<sup>36</sup> Zimmermann, Albert: a. a. O., S. 71.

に約 16,000 人に増加している。さらに、1925 年には青年国境地域活動中央本部の創設に参加し<sup>37</sup>、1926 年には会員数が約 23, 000 人に達した。この数は、第一次世界大戦後の激動期に青年団体の結集を目的として設立された「ドイツ青年団体委員会」が改称した「ドイツ青年団体全国委員会」に属する「同盟青年」諸団体の会員総数の約 4 % を占めていた。<sup>38</sup> こうして、「遍歴職人」は「同盟青年」の欠くべからざる構成要素となり、「民族主義的に方向づけられた労働組合に、左翼の運動には夢想することしかできない多大な影響を及ぼした」<sup>39</sup> のであった。

#### 4. 「青年ドイツ同盟」と「若きドイツ人同盟」への関与

このように、DHV の青少年教育が民族主義的な基盤に立って遂行されたことは、「商業青年同盟」と「遍歴職人」が加入した二つの外部団体の特色によっても裏づけられる。

その一つは、「青年ドイツ同盟」(Jungdeutschlandbund)である。この組織は、国家と軍、教育界、商工業家などの強力な支援の下、陸軍元帥コルマール・フォン・デア・ゴルトスが 1911 年 1 月に結成したもので、若者を一種の準軍事的な防衛教育にまとめることを目標とした。つまり、青少年に軍国主義的な思想を鼓吹し、反社会民主主義的な思想を注入して、彼らを排外主義的爱国者に仕立て上げることを目指しており、当時のドイツにおいて青少年育成事業が国家主義的・軍事的色彩を濃厚にしていたことを示す団体だったのである。<sup>40</sup> この同盟の設立には「遍歴職人」の指導者が深くかわり、また逆に、「青年ドイツ同盟」の会員も DHV の青少年活動と密接に結びついていたと言われるが<sup>41</sup>、両者の関係について、連合の幹部の一人アルフレート・ロートは、

<sup>37</sup> 田村栄子・星乃治彦(編)：ヴァイマル共和国の光芒——ナチズムと近代の相克(昭和堂)2007年、135頁以下参照。

<sup>38</sup> 田村栄子：若き教養市民層とナチズム——ドイツ青年・学生運動の思想の社会史(名古屋大学出版会)1996年、243頁参照。

<sup>39</sup> Neger, Katja & Zimmermann, Rüdiger(bearbeitet): a, a, O., S. 10.

<sup>40</sup> 田村栄子：若き教養市民層とナチズム——ドイツ青年・学生運動の思想の社会史、56頁、および望田幸男・田村栄子：ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち(有非閣)1990年、151頁参照。

<sup>41</sup> Vgl. Hamel, Iris: a. a. O., S. 152.

『ドイツ商業の番人』において、次のように述べている。

その設立者、つまり陸軍元帥フォン・デア・ゴルトの著作と講演は、(中略) 私たちに、その同盟がその中で活動すべき精神が私たちの精神だということを示しています。またそれは、ドイツの若者の中に祖国の意識を覚醒することにも役立ちます。それゆえ、その同盟と私たちの連合は、この戦いにおいて自然な同盟仲間なのです。(傍点訳者)<sup>42</sup>

「青年ドイツ同盟」は、1914年にはおよそ35の同盟を包括し、14歳から20歳の青少年75万人、すなわち同年齢の青少年の約5分の1を擁するまでに発展した。<sup>43</sup>

もう一つは、「若きドイツ人同盟」(Jungdeutscher Bund)である。この組織は、第一次世界大戦後の1919年8月に、「自由ドイツ青年」に属していた同盟のうち民族主義的な考えを持つグループによって結成されたものであり、それを支持した人々の中には、ヴィルヘルム・シュターペル、法律家のハンス・ゲルバー<sup>44</sup>、フィヒテ協会で雑誌『若きドイツ人の声』の主筆を務めたフランク・グラッツェル、クリスティアン・クラウス、フィヒテ協会の講師を務めたエーミール・エンゲルハルト、フィヒテ協会の事務局を務めたカール・ベルンハルト・リッターなどがいた。中でも最も中心的な役割を担ったグラッツェルは、1892年に生まれ、1910年からワンダーフォーゲルに参加し、ベルリン大学で法学と国家学を学んだ後、弁護士となり、DHVの専門的顧問やDHVの姉妹団体であるフィヒテ協会の事務局のメンバーも務めた。そして、社会主義的な階級対立的発想ともワイマール共和国の民主主義とも

<sup>42</sup> Deutsche Handels-Wacht, 1912, Nr. 21. (Zitiert nach Hamel, Iris: a. a. O., S. 149.)

<sup>43</sup> Vgl. Hamel, Iris, a. a. O., S. 149. および田村栄子：若き教養市民層とナチズム——ドイツ青年・学生運動の思想の社会史、56頁、70頁参照。

<sup>44</sup> ゲルバーは、1921年の著書『青年運動について』において、DHVの青少年育成の目的を「民族的基盤に立脚した人格と職業の教育」と呼んでいる。Gerber, Hans: Ueber die Jugendbewegung. Herausgegeben von Frank Glatzel. Deutsche Jugend 1. Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt Aktiengesellschaft 1921, S. 22.

対峙して、国家有機体説に立ち、ドイツ人の民族共同体としてのドイツ国家の構築を助ける「行動共同体」としての同盟を目指していた。<sup>45</sup> 彼は、「私たち若きドイツ人同盟の者は、私たちの民族性の力から自力で成長した人間となり、外面的対立を克服して、すべてのドイツ人の真の民族共同体を創造し、私たちの民族的生活の基礎と現れとしてのドイツ帝国を建設することを手助けするつもりです」(傍点訳者)<sup>46</sup> と述べ、「若きドイツ人同盟」の使命として、次の三点を強調している。

- ① 民族主義的青年運動の行動共同体、信条の共同体となり、新しい民族意識を告知し仲介すること。
- ② 民族共同体の創造を期して、社会を編成し直すこと。
- ③ まだ一度も完全に現実となったことはないが、我々の心の中にある理念の現れとしてのドイツ帝国のために活動すること。<sup>47</sup>

こうして、第一次世界大戦後の「最大の右翼組織」<sup>48</sup> となった「若きドイツ人同盟」は、——1924年にグラッツェルが引退した後も——民族教育の問題と社会的・政治的な問題に取り組むことにより、ワンダーフォーゲルや自由ドイツ青年などに見られる青年運動の本来の非政治的なレベルを離れ、メンバーに政治的なアンガージュマンを求めて行ったのであった。

## 5. ナチズムへの接近

このように、きわめて民族主義的な外部団体とも密接なかかわりを持ちながら展開された DHV の青少年教育は、ワイマール時代の末期になると、参

<sup>45</sup> 田村栄子：若き教養市民層とナチズム——ドイツ青年・学生運動の思想の社会史、117頁、および165頁以下参照。

<sup>46</sup> Glatzel, Franz: Jugendbewegung. In: Fichte-Stiftung: Verhandlungsbericht, S. 59. (Zitiert nach Hamel, Iris: a. a. O., S. 150.)

<sup>47</sup> Vgl. Hamel, Iris: a. a. O., S. 151.

<sup>48</sup> ラカー、ウォルター（西村稔訳）：ドイツ青年運動——ワンダーフォーゲルからナチズムへ（人文書院）1985年、143頁。

加者の間にナチズムとの情緒的なつながりを誘発することとなった。そのことは、例えば、1929年のダンツイヒでの帝国青少年大会に関する若い会員の報告によく表れている。この大会の開催にあたっては、『若き商人のための雑誌』において、6ヶ月間に亘って予め東部地域の経済的、文化的、政治的問題が取り上げられ、60,000人の読者全員に対して予備知識が与えられていた。そして大会後、「商業青年同盟」の6,000人の参加者が徒歩旅行を行い、ドイツ東部の体験を心に刻んだ。ある参加者は、その様子を次のように記している。

夕暮れの影がダンツイヒの路地と隔々に沈む間に、ハーゲルスベルクの古い城塞の波止場の背後に、次々とガウが勢ぞろいします。松明が配られます。(中略) 10時です。厳格な号令が、夜の静けさを突如切り裂き、隊列をこわばらせます。楽団の音がホーエンフリートベルクに高らかに鳴り響きます。6,000人の若者が不動の姿勢を取ります。この男らしい音楽のリズムが、拍子の中に脈を打たせます。——歩調とれ——進め！——そして、果てしない沈黙の隊列が行進を始めます。数千の松明が燃え上がり、激しく燃える炎の反射を夜空に投げ上げます。(中略) すべての窓が、ハンカチを振る人々で占められます。(中略) 娘らの手から、花が投げられます。(中略) 老人たちは、行進する男らしい若者たちに帽子を脱いで挨拶し、子どもたちは、父親によって高く持ち上げられます。自由を愛する、真にドイツ的な、新しい種族の顔が、彼らに刻まれるように。勝利に満ちた民族的若者のイメージが、ダンツイヒの人々の心の中にしっかりと残ります。(傍点訳者)<sup>49</sup>

また、別な参加者も、次のように述べている。

ダンツイヒの大会によって帝国指導者たちが私たちに授けてくれた世

<sup>49</sup> DHV-Rechenschaftsbericht für 1929, S. 233. (Zitiert nach Hamel, Iris: a. a. O., S. 155.)

界観の授業は、強烈であり明白です。私たちは、私たちの兄弟の国境地帯の困難をととも強く深く認識できるようになりました。けれども、スラヴの傭兵の群れが生粋のドイツの土地を、ドイツの文化と文明を廢墟に引き渡す様を、なすすべもなく傍観せねばならないのです。とにかく齒を食いしばり、自由と復讐の日を期待する、期待するのみです。<sup>50</sup>

このような報告を前にしたとき、DHV の若い会員の多くがその後ナチズムの運動へと参加して行ったことも驚くにはあたらず、むしろそこに、長年に及ぶ DHV の青少年教育の一つの帰結を見ることができる。連合の幹部マックス・ハーバーマンは、1931 年に DHV の若い会員たちに向けて行った演説でも、商業職員の身分確立のための運動を強く訴えかけているが<sup>51</sup>、序論で述べたように実質的なプロレタリアート化に対して商業補助者や徒弟が抱いていた危機感と、ここに見たような民族主義的な教育の強い情緒的影響が重なり合って、彼らはナチスの唱道する第三帝国への過大な期待を抱き、ヒトラーが首相に就任した 1933 年 1 月 30 日をまさに「自由と復讐の日」として歓迎したのであろう。

## 6. まとめ

以上のように見たとき、DHV の青少年教育の特色を次のようにまとめることができよう。

- (1) 「商業青年同盟」と「遍歴職人」という二つの同盟を核として、全国規模で教育が行なわれている。
- (2) 第一次世界大戦前には「青年ドイツ同盟」、戦後は「若きドイツ人同盟」という右翼的な団体に加わっている。
- (3) 青年運動本来の非政治的なレベルを離れ、民族主義的な国家共同体の

<sup>50</sup> Ebenda. (Zitiert nach Hamel, Iris: a. a. O., S. 155.)

<sup>51</sup> Vgl. Habermann, Max: Stand und Staat, eine Rede an die junge Mannschaft des DHV. Hamburg/ Berlin/ Leipzig: Hanseatische Verlagsanstalt 1931.

実現へ向けた教育が重視されている。

- (4) 準軍事的な訓練も行なわれている。
- (5) ナチズムと近親性を持つ。

なお、すでに一部触れたように、DHVの青少年教育においても雑誌が活用されていた。具体的には、「徒弟部門」から「商業青年同盟」へ至る系列で1904年より刊行された『若き商人のための雑誌』（Blätter für junge Kaufleute）と、「遍歴職人」で1913年から刊行された『遍歴職人』（Der fahrende Gesell）、それにフィヒテ協会において1919年から刊行された『若きドイツ人の声』（Jungdeutsche Stimmen）である。これらの詳細については、別な機会に論じることにしたい。

## 結論

以上、DHVの教育活動について、「職業教育」、「一般教育」、「青少年教育」という三つの分野に分けて見てきたが、これらを踏まえてその全体的な特色を考えたとき、まず実施形態について、次のようなことが言えるであろう。

- (1) 商業学校、語学学校、出版部門、青少年組織といったものを独自に備えている。
- (2) 本部と地方支部の連携の下、きわめて組織的、計画的に実施されている。
- (3) 書籍、スライド、映画といった教材を豊富に備えている。
- (4) 雑誌を通じた情報提供や広報宣伝が活発に行われている。
- (5) 外部の諸団体とも様々な連携が行われている。

すでにこれらの特色が、DHVの教育活動がきわめて大規模かつ計画的に実施されており、一労働組合の教育活動として他に類を見ないようなものであることを示しているのである。だが、それにも増してDHVの教育活動の固有の特色と言えるのは、とりわけ「一般教育」と「青少年教育」に見られ

る次のような特色である。

- (1) 商業職員の身分上昇のため、職業的知識だけでなく、より広い一般教養を身につけることが重視されている。
- (2) そのさい、ドイツ人の民族性に基づく国家共同体の実現へ向けて、信条や世界観を培うことが重視されている。

このように、DHV の教育活動においては、商業職員の身分の上昇・確立という観点から幅広い教養教育を施すことに特に重点が置かれており、しかも、その教育の思想的な基盤は——労働組合であるにもかかわらず——きわめて保守的なものなのである。

こうして、DHV は、会員の「民族主義的な感覚を刺激すること」<sup>52</sup> により、彼らを、ユダヤ主義や共産主義、あるいは資本主義や都会化、アメリカニズムといったものに対抗する国家主義的な「文化的更新の担い手」<sup>53</sup> へと育て上げようと努め、それによって、1900 年代初頭からワイマール時代を経てナチ時代初頭に至るまで一貫して、ドイツにおける民族主義的・国家主義的な信条の普及に貢献した。それは、資本主義的大経営の発展とプロレタリア運動の高まりの中で身分の低下に対する危機感を強めていた商業職員に強い影響を及ぼし、とりわけ大恐慌による経済危機以後、彼らのナチズムへの急速な接近をもたらしたのであった。このことは、逆に、DHV に対するナチスの接近からも裏づけられる。ナチスの指導部は、大衆への影響力を拡大するにあたり、とりわけ DHV を利用したが、その理由は、「その会員が、DHV の <教育活動> の枠内での長年に互る民族主義的な影響により、特に容易にナ

<sup>52</sup> Edmondson, Nelson: The Fichte Society: A Chapter in Germany's Conservative Revolution. In: The journal of modern history / University of Chicago – University of Chicago Press – 1966, Vol. 38(2), p. 161-180, here p. 163.

<sup>53</sup> Hoepke, Klaus-Peter: Die deutsche Rechte und der italienische Faschismus. Ein Beitrag zum Selbstverständnis und zur Politik von Gruppen und Verbänden der deutschen Rechten. Herausgegeben von der Kommission für Geschichte des Parlamentarismus und der politischen Parteien. Düsseldorf: Droste Verlag 1968, S. 11

チスに獲得され得たから」<sup>54</sup>であった。こうした意味で、1930年9月の総選挙への投票行動以後顕著に見られるDHV会員のナチス支持は、商業職員が置かれていた経済的窮状のみに起因しているのではなく、DHVにおいて長年に亘って実施された会員への広範な教育活動の結果でもあったのであり、ここに、ドイツにおいて因習的な中間層イデオロギーがナチズムと合流した過程の一端を見ることができるのである。

## 参考文献一覧

### 1. 一次文献

#### 1. 1. DHVの定期刊行物

##### (1) Deutsche Handels-Wacht.

- ・ Inhaltsverzeichnisse von 1922, Nr.1-37.
- ・ 1928, Nr. 20, S. 412: Norwig: Das berufsständische Seminar des D. H. V.
- ・ 1928, Nr. 24, S. 485.
- ・ 1933, Nr. 19, S. 268.
- ・ 1933, Nr. 4, S. 50.

##### (2) Volkstum und Leben. Beilage zur „Deutschen Handels-Wacht“.

- ・ 1922, Nr. 2, S. 90: Anonym: Gewerkschaftspolitik und Bildungsarbeit.
- ・ 1922, Nr. 8, S. 409: Weinberger: Die Lichtbildstelle des D. H. V.
- ・ 1922, Nr. 9, S. 457: Ziegler: Unser Bildungswesen.
- ・ 1925, Nr. 8, S. 441: Otto Henschel: Die Aufgabe der Geselligkeitspflege.
- ・ 1925, Nr. 8, S. 441: Weitenauer: Rundgang durch die Bildungsarbeit der Abteilung 17.
- ・ 1925, Nr. 8, S. 442: Krebs: Die Volksschule und wir!

<sup>54</sup> Böttger, Siegwart & Fritsch, Werner: Deutschnationaler Handlungsgehilfen-Verband(DHV) 1893-1934. In: Fricke, Dieter(Hg. Als Leiter eines Redaktionskollektivs): Die bürgerlichen Parteien in Deutschland. Handbuch der Geschichte der bürgerlichen Parteien und anderer bürgerlicher Interessensorganisationen vom Vormärz bis zum Jahre 1945, Bd. 2, Berlin(Ost) 1968, S.702-714, hier S. 710.

- ・ 1926, Nr. 7, S. 365: Krebs: Standwerdung als Bildungsproblem.

(3) Kaufmännische Praxis. Beilage zur „Deutschen Handels-Wacht“.

- ・ 1925, Nr. 5, S. 215-218.
- ・ 1925, Nr. 5, S. 215: Anonym: Das Hochschulstudium für Kaufleute.
- ・ 1926, Nr. 9, S. 454: Stange, Heinz: Die Kaufmannschule des D. H. V. in Hamburg.

(4) Welt des Kaufmanns

- ・ Inhaltsverzeichnisse von 1923, Heft 1(Okt.)-1927, Heft 12(Sept.); 1928, Heft 1(Okt.)-1932, Heft 12(Sept.); 1933, Heft 11(Aug.).
- ・ 1926, Heft 1(Okt.), Titelbild.
- ・ 1933, Heft 11(Aug.), S. 353.

(5) Kultur des Kaufmanns

- ・ Inhaltsverzeichnisse von 1921, Heft 4(Jan.)-6(März), 8(Mai)-12(Sept.), 3(Dez.).
- ・ 1921, Heft 6(März), Titelbild.
- ・ 1921, Heft 8(Mai), Rückseite des Einbands.

1 . 2 . その他

- ・ Gerber, Hans: Ueber die Jugendbewegung. Herausgegeben von Frank Glatzel. Deutsche Jugend 1. Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt Aktiengesellschaft 1921.
- ・ Habermann, Max: Stand und Staat, eine Rede an die junge Mannschaft des DHV. Hamburg/ Berlin/ Leipzig: Hanseatische Verlagsanstalt 1931.
- ・ Zimmermann, Albert: Der Deutschnationale Handlungsgehilfen-Verband. Sein Werden, Wirken und Wollen. Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt 1921.

## 2. 二次文献

### 2. 1. 欧文文献

- ・ Böttger, Siegwart & Fritsch, Werner: Deutschnationaler Handlungsgehilfen-Verband(DHV) 1893-1934. In: Fricke, Dieter (Hg. als Leiter eines Redaktionskollektivs): Die bürgerlichen Parteien in Deutschland. Handbuch der Geschichte der bürgerlichen Parteien und anderer bürgerlicher Interessenorganisationen vom Vormärz bis zum Jahre 1945, Bd. 2. Berlin (Ost) 1968, S.702-714.
- ・ Edmondson, Nelson: The Fichte Society: A Chapter in Germany's Conservative Revolution. In: The journal of modern history / University of Chicago – University of Chicago Press – 1966, Vol. 38(2), p. 161-180.
- ・ Evangelisches Johannesstift Berlin, Historisches Archiv(Hg.): Historisches Archiv des Evangelischen Johannesstifts Berlin. Bestände und Sammlungen. Stand: Januar 2006.
- ・ Hamel, Iris: Völkischer Verband und nationale Gewerkschaft. Der Deutschnationale Handlungsgehilfen-Verband 1893-1933. Frankfurt a. M.: Europäische Verlagsanstalt 1967.
- ・ Hoepke, Klaus-Peter: Die deutsche Rechte und der italienische Faschismus. Ein Beitrag zum Selbstverständnis und zur Politik von Gruppen und Verbänden der deutschen Rechten. Herausgegeben von der Kommission für Geschichte des Parlamentarismus und der politischen Parteien. Düsseldorf: Droste Verlag 1968.
- ・ Nerger, Katja & Zimmermann, Rüdiger(bearbeitet): Zwischen Antisemitismus und Interessenvertretung. Periodika und Festschriften des Deutschnationalen Handlungsgehilfen-Vereins in der Bibliothek der Friedrich-Ebert-Stiftung. Ein Bestandsverzeichnis. Bonn: Bibliothek der Friedrich-Ebert-Stiftung 2006.
- ・ Schildt, Axel: Konservatismus in Deutschland. Von den Anfängen im 18. Jahrhundert bis zur Gegenwart. München: Verlag C. H. Beck 1998.

## 2. 2. 和文文献

- ・雨宮昭彦：第二帝政期ドイツにおける商業労働力の存在形態——ドイツ職員 (Angestellte) 問題の一側面 (政治経済学・経済史学会『土地制度史学』第30巻・第1号, 1987年, 1～21頁)。
- ・雨宮昭彦：第一次世界大戦前ドイツにおける中・下級商業職員の職業的育成——徒弟制度の変質と商業学校の発展 (社会経済史学会『社会経済史学』56巻・第1号, 1990年, 62～93頁)。
- ・ヴィンクラー, H・A (後藤俊明・杉原達・奥田隆男・山中浩司訳)：ドイツ中間層の政治社会史 1871 - 1990年 (同文館) 1994年。
- ・ヴィンクラー, ハイน์リヒ・アウグスト (後藤俊明・奥田隆男・中谷毅・野田昌吾訳)：自由と統一への長い道 I・II (昭和堂) 2008年。
- ・竹岡健一：雑誌『かまどの火』について——ナチズムと文学メディアのかかわりに関する考察の新たな手がかりとして (日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第116号, 2004年, 61～68頁)。
- ・竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合 (DHV) の歴史と活動——労働組合活動と政治的動向とのかかわりを中心に (鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第71号, 155～173頁, 2010年)。
- ・竹岡 健一：「ドイツ家庭文庫」について——ワイマール共和国時代から第三帝国時代における右翼商業職員への読書指導の一端 (研究同人誌『かいろす』第47号, 2009年, 84～104頁)。
- ・竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合 (DHV) の教育活動——その全体像と「民族主義的」特色—— 第I部 序論と職業教育 (鹿児島大学言語文化論集『VERBA』第35号, 2011年, 91～112頁)。
- ・田村栄子：若き教養市民層とナチズム——ドイツ青年・学生運動の思想の社会史 (名古屋大学出版会) 1996年。
- ・田村栄子・星乃治彦 (編)：ヴァイマル共和国の光芒——ナチズムと近代の相克 (昭和堂) 2007年。
- ・ボイカート, デートレフ (木村靖二・山本秀行訳)：ナチス・ドイツ——

ある近代の社会史（三元社）2005年。

- ・望田幸男・田村栄子：ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち（有非閣）1990年。
- ・山口定：ナチスの抬頭と中間層（東京大学社会科学研究所「ファシズムと民主主義」研究会編『運動と抵抗 中』ファシズム期の国家と社会7〔東京大学出版会〕1979年，147～192頁。
- ・ラカー，ウォルター（西村稔訳）：ドイツ青年運動——ワンダーフォーゲルからナチズムへ（人文書院）1985年。
- ・鷺巣由美子：ホワイトカラーの家族像：ファラダの『しがない男よ，さあどうする』を中心に（『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第3号，1999年，211～237頁）。

#### 付記

- (1) 本稿は、平成22年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「第一次世界大戦後のドイツにおける民族主義的読書共同体〈ドイツ家庭文庫〉とナチズム」（課題番号：22520320，研究代表者：竹岡健一）による研究成果の一部である。
- (2) 本稿の執筆にあたり、平成22年9月6日から17日まで、ドイツ連邦共和国ライプツィヒ市の「ドイツ国立図書館」とボン市の「フリードリヒ・エーベルト財団附属図書館」において調査を行った。貴重な蔵書の閲覧と複写を許可して下さった両図書館に対し、この場を借りて謝意を表する。
- (3) 本稿の内容の一部は、日本独文学会秋季研究発表会（平成22年10月10日 於千葉大学）において、口頭発表を行った。